

全力で走り続ける日々

会員 豊島 國史



■ 新人弁護士であるということ

私が入所した事務所は、弁護士30名程度の企業法務中心の事務所である。

当事務所の仕事においては何よりも「クオリティ」が重視され、事務所の弁護士は口を揃えて「クオリティ」の高い仕事を要求する。しかし、仕事の「クオリティ」とはこういうものですなどと教えてくれる人は誰もいない。新人弁護士は、経験豊かな弁護士と一緒に仕事をするを通じて、仕事の「クオリティ」とはどのようなものかを考え、自分の仕事の「クオリティ」を上げていくしかない。

ところで、弁護士の仕事の「クオリティ」の大きな要素として、経験及びそれに裏打ちされた判断があると私は考えている。しかし、私のような新人弁護士は、経験豊かな先輩弁護士に経験やそれに裏打ちされた判断力などは遠く及ばない。経験があろうとなかろうと同じプロの弁護士として仕事をしている以上、新人だから「クオリティ」の高い仕事はできないともいえない。新人弁護士が先輩弁護士に勝てるものといったら、1つの事件にかけることができる時間だけである。そのため、少なくとも当該事件の記録を綿密に読み込むとか必要に応じて当事務所において扱った過去の事件の記録を参考にしたり文献調査を綿密に行なうなど、時間をかけて丁寧に仕事をするようこころがけている。

平日は終電で帰ることも多く、土日に仕事をしなければならないこともしばしばであるが、今はとにかくがむしゃらにがんばっている。

■ 父親であるということ

2月に娘が生まれ、私は父親になった。ただでさえ平日は朝から夜遅くまで働き土日両方休めることがあまりないような状況であったにもかか

わらず、娘が生まれてからというもの、夜は起こされて休日も休めず、ゆっくりと休む時間がなくなってしまった。子供の成長は早く少しの間でも娘の面倒をみることを怠ったら私の知らない間に成長してしまいそうである。父親として娘の成長をずっと見続けたいから、体力的にはかなりきつい、もうしばらくがんばってみようと思う。

■ 夫であるということ

私は妻と修習中に結婚した。妻は関西出身で、東京に縁のない人である。なれない場所でなれない子育てをするのは大変だと思う。そんな妻のために現在私ができることといったら育児に協力することぐらいである。夫として妻のために何ができるか現在模索中である。

■ 息子であるということ

よく「子を思う親の気持ち」などというが、子供が生まれ父親になってみてそれがどのようなものか少しだけわかった気がする。両親が私のためにどれだけ苦労し、心配し、愛情を注いでくれたのか。私が小さいころは悪さをして父親に殴られ、その痛さで大泣きしたことも一度や二度ではない。最近になって、私を殴った父親の方が何倍も痛かったのではないかと思うようになった。

■ 最後に

私は2004年11月に司法試験に最終合格し、それ以降現在まで自分を取り巻く環境がものすごいスピードで変化している。現在、私は変化の中を全力で駆け抜けている。このエッセイを書くにあたり、自分の現状を見つめなおしてみてもそれがわかった。この生活は当分続きそうなので、全力で走り続ける日々はしばらく続きそうである。